**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第２７回　（２０１６年　８月９日）**

**・第２７回の勉強範囲：「第一章　師と弟子」６～７頁**

・📖 （読む）「師と弟子」　６頁上段Ｌ６～Ｌ１７

***M「はい、しております」***

***シュリー・ラーマクリシュナ（身ぶるいをして）「おお、ラムラル……彼は結婚しているのだって！」***

***恐ろしい罪を犯した者のようにMは地面を見つめてじっとすわっていた。彼は「結婚するのがそんなに悪いことなのだろうか」と思った。***

***師はつづけられた、「子供たちがいるのか」***

***Mは今度は自分の心臓の鼓動をきくことができた。彼は震え声で、***

***「はい子供たちもおります」とささやいた。***

***非常に悲しそうに、シュリー・ラーマクリシュナはおっしゃった、「おお！　子供たちまでいるとは…」***

***このように非難されて、Mは言葉もなくすわっていた。彼の誇りは一撃を受けたのだ。***

（解説）

ここには「批判」と書いてありますか？

「非難と書いてあります」

「非難」は英語のscolding（叱る）と同じ意味ですか？

「scolding（叱る）のほうが強い意味だと思います」

『福音』のベンガル語版ではスコレッドです。（編者注＊英語版ではrebuked（非難される））

・📖 （読む）「師と弟子」　６頁上段Ｌ１７～Ｌ２１

***Mは言葉もなくすわっていた。彼の誇りは一撃を受けたのだ。二、三分後にシュリー・ラーマクリシュナはやさしく彼を眺め、愛情をこめておっしゃった、「ね、お前はある良いしるしを持っているのだよ。私はそれを、人のひたいや眼差しなどを見て知るのだ。***

(解説)

**良いしるし**

結婚は特別なことではありませんね。ふつうです。子どもを持つことも結婚のひとつの目的です。当時のインドの伝統では若いうちに結婚をして子供を持つのはふつうのことでした。シュリー・ラーマクリシュナの弟子の中にも家住者はたくさんいましたね。しかしMさんに対してだけ結婚していることを非難しました。シュリー・ラーマクリシュナが亡くなった後に、いろいろな信者が回顧録を書きましたが、誰も結婚について非難されたとは書いていません。

ではなぜ、Mさんだけを非難したのですか？

「Mさんには良いしるしがあったから」

そうです。それでは良いしるしの意味は何ですか？なぜシュリー・ラーマクリシュナはMさんが結婚をしていると聞いてショックを受けたのですか？

**良いしるしの意味は、霊的進歩の可能性がある**ということです。

もしMさんが結婚していなかったら、早い段階で他の出家弟子と同じレベルまで上げることができました。しかし、結婚をして家族がいると、すべての時間と力を神様のためだけに使うことができないですね。家族を扶養するためにお金を稼がなくてはいけません。それだけではなく、家族のことを心配もします。そして自由がなくなります。

シュリー・ラーマクリシュナは目、額などから良いしるしを見ることができました。特に若い人の手の重さをはかるなどして、肉体的なしるしを見ていました。『福音』の中にもありますね。しかしMさんに対してはそこまでしなくても、顔や目を見て良いしるしがあると分かりました。残念ながらシュリー・ラーマクリシュナがどうやってそれを勉強したのかは誰にも分かりません。

**Mさんには霊的に進歩をする可能性がありましたが、その可能性だけでは絶対に進むことはできません。可能性を耕して実際に力を使い、実践をしなければならないのです。**

例えば種のことを考えてください。良い種をまいても、水や肥料をやらなければ育ちませんでしょ。それと同じことです。Mさんには可能性がありました。しかし家族、息子、娘がいましたから、自由がない。時間と力も分けなければいけない。だけではなく恐怖や心配も生じます。それでは十分に霊的な実践が出来ません。

あとになって、シュリー・ラーマクリシュナはMさんに「あなたは家族を持っていなければよかったですね」と言いました。

大事なことは、こうした**シュリー・ラーマクリシュナの見方を理解する**ことです。そうしないと、結婚も子供も普通のことなのにシュリー・ラーマクリシュナはそれを悪いことだと思っている、と誤解してしまいます。

Mさんは後になってシュリー・ラーマクリシュナに「お坊さんになりたい」と何回も頼みましたが、「あなたはすでに結婚したのですから、結婚生活を続けてください」と、許されませんでした。そしてそれだけではなく、「**理想的な家住者になってください**」

と言われました。家住者の信者たちのために、Mさんが家住者の理想となることも大事だったのです。Mさんはそれを守りましたがお坊さんになることができなかったので、心には少し悲しみがありました。

またこの時、シュリー・ラーマクリシュナがMさんに、「ね、お前はある良いしるしを持っているのだよ」と言ったのは、Mさんのフィーリング（少し悲しい気持ちと、自分は何も悪いことをしていないのに何が問題なのかという思い）が分かったからで、慈悲をもって愛情をこめてそう言葉をかけたのです。

・📖 （読む）「師と弟子」　６頁上段Ｌ２１～Ｌ２３

***今度は、お前の奥さんはどんな人なのか話しておくれ。彼女は霊的な性質を持っているのか、それともアヴィディヤーの支配下にあるのか***

(解説)

**ヴィディヤー・シャクティ、アヴィディヤー・シャクティ**

「霊的な性質」という翻訳は「ヴィディヤー・シャクティ」と言う言葉を使った方がよかったですね。ヴィディヤー・シャクティとアヴィディヤー・シャクティとはペアですから。ベンガル語の原文では、ヴィディヤー・シャクティとアヴィディヤー・シャクティとなっています。

「『彼女はヴィディヤー・シャクティを持っているのか』のほうが良いということですね？」

そうです。ヴィディヤー・シャクティの意味は、「性格が霊的」だからです。

いま英語版を確認したところ、spiritual attributes　と　power of avidyaを使っていますが、英語版もの言い方にしたほうが良かったと私は思います。（＊編者注：spiritual attributes の直訳は「霊的な性質」、power of avidya の直訳は「アヴィディヤーの支配下」）

**「ヴィディヤー」、「アヴィディヤー」という言葉の捉え方**

（＊編者注：「アヴィディヤー」の「ア」は否定を意味する接頭辞。すなわち、ヴィディヤーは「知識」、アヴィディヤーは「無知」、が直訳になります）

**・一般的な捉え方**

・ヴィディヤー：学校や本などで学んだ知識や学問がある

・アヴィディヤー：勉強のチャンスがないなどの理由でそうした知識や学問がない

**・シュリー・ラーマクリシュナの捉え方**

・ヴィディヤー：霊的な知識がある＝神様を愛し、識別ができ、執着がなく、清らかである

・アヴィディヤー：霊的な知識がない＝神様への愛が全然ない、識別しない、執着、欲望がたくさんある

**・ヴィディヤー・シャクティ、アヴィディヤー・シャクティ**

シュリー・ラーマクリシュナは『福音』の中で何回もヴィディヤー・シャクティとアヴィディヤー・シャクティの説明をしていますね。　　☞（『福音』49頁上段21～下段2）

もし旦那さんがヴィディヤー・シャクティ（霊的な性質）で奥さんがアヴィディヤー・シャクティ（世俗的な性質）だと、だんなさんは大変ですね。奥さんがヴィディヤー・シャクティで旦那さんがアヴィディヤー・シャクティの場合もある。男性女性は関係ありませんね。

ふたりとも世俗的だと、とてもいいコンビです。（笑い）

ふたりとも霊的なことが好きであれば素晴らしいですが、そのケースは少ないです。

「もし、二人ともヴィディヤー・シャクティでしたら結婚しないと思いますが」

ヴィディヤー・シャクティであっても結婚はできます。放棄とはまた別の話です。

バララーム・ボシュのことを考えてください。バララーム・ボシュもその家族も結婚していましたが、みんな霊的なことが好きでしたね。しかし、神様のことが一番好きなので結婚はしない、放棄のことが好き、というのは、もっともっと高いレベルですね。

・📖 （読む）「師と弟子」　６頁下段Ｌ１～Ｌ２

***M「彼女は申し分ございません。しかし、無知ではないかと存じます」***

（解説）

**ギャーナ、アギャーナ**

ふつう、奥さんに関して「ヴィディヤー・シャクティか、アヴィディヤー・シャクティか」などという質問はしません。このような質問はインドでもしません。だから当時のMさんは一般的な意味の解釈しかできず、シュリー・ラーマクリシュナの言うヴィディヤーとアヴィディヤーの意味が分かりませんでした。だから、自分の妻のことを「無知」だと答えました。「人はいいが無知な人、ギャーナな無知、つまりアギャーナな人」だと答えたのです。当時のインドの奥さんは勉強をする機会がないのがふつうでした。だから学問的な知識がないのはふつうなことでした。

一方Mさんは校長で、マスター（修士号）をたくさん持っていましたから、自分は知識があると思っていました。

・📖 （読む）「師と弟子」　６頁下段Ｌ３～Ｌ１０

***師（はっきりと不満の色を浮かべて）「そしてお前は知識の人であるというのだね！」***

***Mはまだ知識と無知との違いをよく知らなかった。このときまで彼は、知識は書物や学校から得られるものと考えていたのである。***

***のちにはこの誤った考えを棄てた。神様を知ることが知識、知らないことが無知である、ということを知った。シュリー・ラーマクリシュナが、「そしてお前は知識の人であるというのだね！」とお叫びになったとき、Mのエゴはふたたび強い衝撃を受けた。***

（解説）

**「知識」という言葉の捉え方**

**・一般的な捉え方**

・学校や本で学んだ学問のことや一般常識などを知識という。

**・シュリー・ラーマクリシュナの捉え方**

・シュリー・ラーマクリシュナが一番大事だと伝えたかった知識とは、いろいろな問題が人生に起こったときにこそ使える知識だった。

・すなわち人生の困難や問題に使える知識、立ち向かえる知識、サポートしてくれる知識。

・それは神様の知識、それが本当の知識である。

・それを聖典などで学び、実践をしなさい。

シュリー・ラーマクリシュナのもとには大学の先生などの知的レベルの高い人たちも来ていましたが、彼らにもシュリー・ラーマクリシュナは「**神様の知識だけが本当の知識で、それ以外の知識は無駄です**」と話しました。☞（『福音』35頁下段13　ほか）

もちろん学校で習う知識などはお金を稼ぐためには必要なので無駄ではありませんが、シュリー・ラーマクリシュナが強調したのはその点ではありませんでした。なぜなら、大学の試験をパスするよりも人生の深い問題はもっと大変で、大学の知識では人生の問題を解決できないということ、神様の知識だけが人生の深い問題を取りのぞくことができるということを知っていたからです。

・📖 （読む）「師と弟子」　６頁下段Ｌ１１～Ｌ１７

***師「さて、お前は形のある神を信じるのか、それとも形のない神を信じるのか」***

***Mはたいへん驚き、心に思った。人は、形のある神を信じているときにどうして形のない神を信じることができるだろう。またもし形のない神を信じているなら、どうして神には形があるなどと信じることができるだろう。この二つのあい矛盾する考えが同時に成り立つだろうか。ミルクのような白い液体が黒くありうるのか。***

（解説）

**形がある神様、形がない神様**

ヒンドゥ教徒は形がある神を礼拝していました。

ブラーフモー・サマージは形がない神を礼拝していました。

「形がある神様も、形がない神様も、両方正しい」という考えに対して混乱を持ったのは、Mさんだけでなく、ほかの人も同様でした。しかし、矛盾があるようで本当は矛盾ではないことが『福音』を勉強した人には分かります。

たとえば、『福音』に出てくる例で、「ある状態のとき形があり、別の状態のときには形がない」というものには何がありますか？

**・H2Oの例**

H2Oが気体の状態ですと、見えないし触れない。

次の状態、液体になりますと、水です。水は見えますけれども、形はなく、つかめません。そしてその次の状態は、固体、氷です。氷には形があり、見ることもつかむことも出来ます。色も白いです。三つの状態がありますが、すべてH2Oです。

神様も同じです。形があるときも、ないときもあります。

ギャーニに対しては神様H2Oの気体のように、形がなく知識だけ、ブラフマンだけ。

バクタに対して神様は、H2Oで例えると、氷のようで、神様の像があります。

見方によって別々に見えます。同じ人がある時、形がない神様を正しいと思い、また別の状態に入ると形があることが正しいと感じる。分かりますね。

いつそれが出来ますか？

**サマーディに入った人だけが分かります。**

**時間、空間、人、物など、相対的なものすべてを超越するので、形も性質も全部なくなります。**

それでサマーディから戻ると本当に形がある神様もない神様も正しいと理解できます。自分が悟ったからその知識が出ます。聖典の中にも福音の中にもそのことが書いてありますが、悟らないと本当の理解はできない。

**自分の身体意識があるあいだは、神様にも体があるという考えが出ます**。もし自分の身体意識がなくなり、意識だけという状態になると、神様も形がなく意識だけだと感じます。同じ人がサマーディの前には神様は形があると感じ、サマーディに入ると神様の形はなくなります。シュリー・ラーマクリシュナは両方の経験があったので、神様に形がないのもあるのも両方正しいと言えたのです。

ブラーフモー・サマージ、キリスト教、イスラム教では神様の形はないと信じています。しかし**我々は自分の体の印象がとても強いので、サマーディに入らないと形のない神様を信じることはできないです。**

聖典で神様に形がないということを勉強していますけれども、それを100％信じることはできないです。だからシンボルを使っています。

そのときMさんにはまだ分かりませんでした。後で何回も来てから分かりましたが、このときはまだ二回目の訪問でしたので、シュリー・ラーマクリシュナから何も教わってなかったですね。だから混乱しました。

・📖 （読む）「師と弟子」　６頁下段Ｌ２８～７頁上段Ｌ３

***M「師よ、私は神を無形だと考えるのが好きでございます」***

***師「非常にけっこうだ。どちらの面からでも、信仰を持っていれば十分だ。お前は形のない神を信じている、それでけっこうだよ。しかし、たとえ一瞬のあいだでも、これだけがほんとうで他は全部うそだ、などと考えてはいけない。形のある神も形のない神様とまったく同じように本物だ、ということをおぼえておいで。ただしお前自身の信念は固く守るようにしなさい」***

***両方が同等に真理である、という主張はMをびっくりさせた。彼は、書物からは決してこれを学んだことがなかったのである。***

（解説）

**自分の信じる神様を信仰すればよい、しかしこれだけが正しいと考えないこと**

あなたは悟るまで、神様の形があると考えても形がないと考えても、どちらでもいいですので、自分の信仰を続けてください。しかし決して、「私の考えだけが正しい」とは言わないでください。

これは、シュリー・ラーマクリシュナの偉大な教えで、実践的な助言でもあります。

**「『私は正しい』と言ってよい。しかし『私だけ正しい』とは言わないでください」**

シュリー・ラーマクリシュナはサマーディに入って悟りましたから、言っていることがとても力強いです。

シュリー・ラーマクリシュナのいるドッキネッショルには、ブラーフモー・サマージ、キリスト教などの形のない神様を信じる人たちと、ヒンドゥ教などの形のある神様を信じる人たちの両方が来ていましたね。その時にシュリー・ラーマクリシュナは、「あなたの信仰がそういう信仰だったらそれを信じてください。しかし他の人に自分の考えだけが正しいと言わないでください」と助言しました。

宗教と宗教の戦い、宗派と宗派の戦いは、インドでも日本でもありますね。例えばある宗派は他の宗派を結構非難します。仏教にもありませんか？

問題なのは、自分の宗派だけが正しいという考えです。

「…だけ」という考えは、コミュニケーションの問題を生み、不調和になり、戦いが起きます。

もうすこし深く論じると、

**神様は無限であなたは有限です。有限の道具で無限のことを理解することはできません**。神様は無限ですから、数えられないほどたくさんの姿をとることができます。しかしあなたは有限ですから、有限の道具で無限のことは計れないですね。それが基本的な問題です。「有限である私」が考える「神様」だけが正しいと考えると、神様に限度が生じますね。それが基本的な矛盾です。とても美しい理論です。５００グラムのポットに１０キロの牛乳は入らないですから。

**・アリの例**

アリの面白い例もありますね。

アリが砂糖の山を見つけました。アリは一粒食べただけでお腹がいっぱいになりました。もう一粒を巣まで運んで考えた。「明日はあの砂糖の山を全部運ぼう」

我々の状態もアリと一緒です。ヒマラヤの土を持てるだけ運んで、「明日はこのヒマラヤ全部を運ぼう」と考えるのと同じです。有限な人間のうぬぼれです。有限と無限に関して、ふつうの学者、ふつうの人はそれくらいうぬぼれています。

そこには大きな二つの問題があります。

①「神様はいない」という内容の本が売られています。そしてたくさんの人がその本を読んで信じます。それがひとつの問題です。

②「この神様だけが正しい」という考えがもうひとつの問題です。例えばキリスト教の中には、プロテスタント、カトリック、ギリシャ正教会、ロシア正教会などたくさんの種類があります。仏教にもヒーナヤーナ、マハーヤーナがありますね。ヴァッジュラーヤーナの中には、浄土宗などいっぱいありますね。また新しいものもでてきます。

Mさんは、今までこのような勉強をするチャンスも聞くチャンスもなかったので、「神様の形があるという考えだけが正しい」、または「神様の形がないという考えだけが正しい」と分けて考えていました。

しかしシュリー・ラーマクリシュナから両方できると聞いてびっくりしました。

みなさんは『福音』を読んでいるので分かりますが、そのとき『福音』はありませんでしたね。

シュリー・ラーマクリシュナのベースはサマーディですから、ふつうの学者の言うことと違ってとっても力強いのです。

（『福音』勉強会第２７回、以上）